集合指導の在り方に関する一考察

～へき地・小規模校における取組の工夫～

小　林　宏　明
（北海道教育大学大学院教育学研究科高度教職実践専攻）

On consideration of the way it should be of “Shugogakushu”

― Device of approach in remote place and small-scale school ―

Hiroaki KOBAYASHI

■ はじめに（研究の目的）

平成21年４月１日から移行措置として実施されている新しい小学校学習指導要領は，①改正教育基本法等を踏まえた学習指導要領の改訂，②「生きる力」という理念の共有，③基礎的・基本的な知識・技能の習得，④思考力・判断力・表現力等の育成，⑤確かな学力を確立するために必要な授業時数の確保，⑥学習意欲の向上や学習習慣の確立，⑦豊かな心や健やかな身体の育成のための指導の充実を基本的な考え方として，次の方針に基づき改訂されている。

○　教育基本法改正等で明確となった教育理念を踏まえ，「生きる力」を育成すること
○　知識・技能の習得と思考力・判断力・表現力等の育成のバランスを重視すること
○　道徳教育や体育などの充実により，豊かな心や健やかな身体を育成すること

この改訂の主旨が実際の指導において生かされるようにするための配慮事項として，合科的・関連的指導，体験的・問題解決的な学習及び自主的,自発的学習の促進，見通しを立てたり，振り返ったりする学習の重視，課題選択や自己の生き方を考える機会の充実，指導方法や指導体制の工夫改善など個に応じた指導の充実，情報教育の充実，コンピュータ等や教材・教具の活用，家庭や地域社会との連携及び学校相互の連携や交流などを挙げている。また，教科の特質に応じ，各教科の学年目標，内容が２学年まとめて示してあったり，各学校が創意工夫を生かした教育活動を行う時間として，総合的な学習の時間の重要性を改めて示している。

これからのへき地・小規模校の教育の充実を図るためには，これらの主旨を踏まえ，へき地性，小規模性，複式形態など，小規模校の持つよさと多人数による学習の長所を重ね合わせることにより，創意工夫のある教育課程を編成し，自主性や社会性，創造性など，豊かな児童生徒の育成を図ることが重要である。

特に，学校や学級単独では困難である学習活動を近隣の2校以上の同学級の児童生徒または，各学校の全児童生徒を一か所に集めて教師の協力教授（TT 方式）によって指導を行う教育方法である集合学習が，児童生徒の社会性や協調性を豊かに育んできたことは教育関係者の誰もが認めるところであり，その研究の充実・推進には今後とも大きな期待がかかるところである。

そこで本研究では，へき地・小規模校の特性を生かした教育活動として，その大きな推進力の一つと考えられる集合学習を取り上げ，それまでの釧路管内のへき地・小規模校の成果と課題を整理するとともに，今後の集合指導の在り方について考察する。

1　釧路管内における集合学習の現状

釧路管内には８市町村があるが，今回の調査では，白糠町を除く７市町村の34校のへき地・小規模校において集合学習（10地域・ブロック）を行っている（平成20年度の調査による）。それぞれの市町村の学校が実施している集合学習では，これまでも地域の特色や状況を踏まえつつ，２校以上の学校が連携協力して，創意と工夫のある活動を継続・実施してきているが，その実施に当たっては課題も多く挙げられている。

そこで，釧路管内における集合学習の現状（成果と課題等）について，釧路小中学校教頭会々員に協力・依頼したアンケート調査と，管内の市町村教育委員会及び主

要な学校を訪問して情報収集をした聞き取り調査を行うこととした。

(1)　釧路小中学校教頭会会員アンケート調査から

本調査は，釧路管内におけるへき地・小規模校校における集合学習の状況を把握するために，釧路管内小中学校教頭会々員である教頭先生に調査を依頼し，整理しまとめたものである。

ア　調査の実施時期

平成20年11月15日

イ　調査の趣旨

へき地・小規模校校における集合学習の現状状況について，アンケート調査を行い，今後の集合学習推進にかかわる分析・考察の一助とする。

ウ　調査の方法

釧路管内管内の小・中学校の教頭（釧路市を除く）に対して調査票による調査を行う。

エ　調査対象

	釧路町	厚岸町	浜中町	標茶町	弟子屈町	鶴居村	白糠町	釧路市	計
小学校	6	4	12	5	6	3	2	－	38
中学校	4	3		3	2	2	2	－	16
小中併置	－	4	5	4	－	－	1	－	14
計	10	11	17	12	8	5	5	－	68

※注１　教頭未配置校は，３校である（平成20年度）。

オ　アンケートの回答数

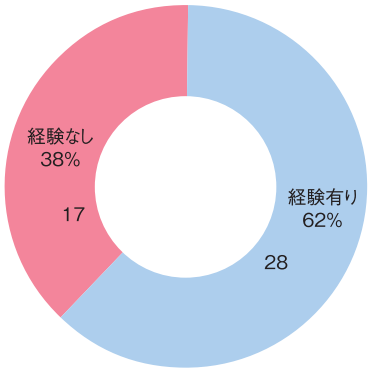
45枚（釧路管内小中学校教頭会の会員数　65名）

カ　調査の主な内容

①　集合学習を指導した経験の有無
②　集合学習を実施していた時の学校の数
③　集合学習を指導した教科等や領域
④　集合学習の年間総授業時数
⑤　集合学習を実施する上での課題

キ　調査結果の考察

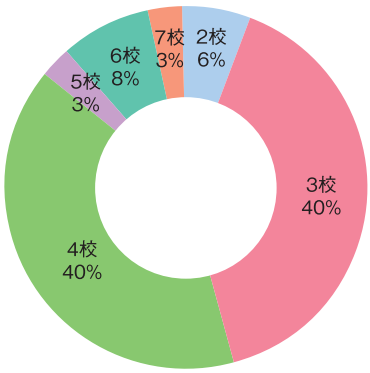
①　集合学習を指導した経験の有無



「集合学習を指導した経験の有無」については，「経験有り」が28名（62%），「経験なし」が17名（38%）おり，比較的教職年数の長い教頭職にあるにもかかわらず，「経験なし」の割合が高いことがわかる。

このことから，相当数の教師が集合学習の意義やねらいのについて理解しているものと捉えず，教職員間で共通認識を持つ機会を充実させたり，集合学習を通して，子どもたちが社会性や協調性を身に付ける機会を拡大している事実を積極的に PR していくことが大切だと考える。

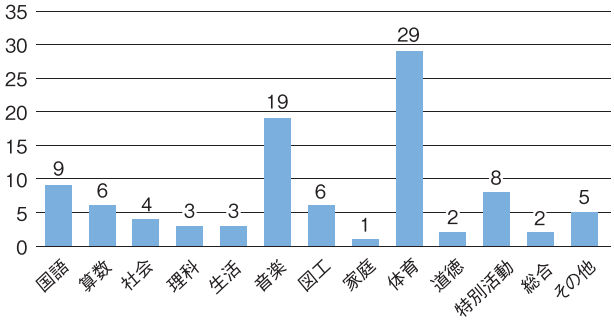
②　集合学習を実施していた時の学校の数



釧路管内では，集合学習を実施する連携協力校の数は２校から７校と幅が広いが，３校と４校で実施している学校がもっとも多く，合わせて80%となっている。

このことは各学校において，近隣の学校間の距離，学校の規模等をはじめ，実質的な効果や効率，児童の社会性や協調性を育むために必要な最低限の人数，教師の負担などを考慮して適正規模を判断しているものと考えられる。

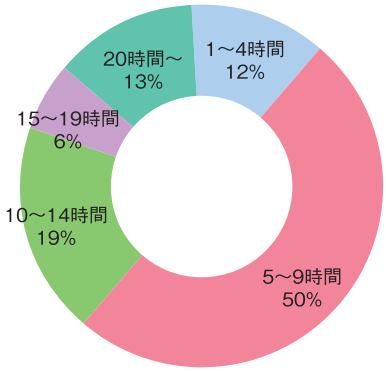
③　集合学習を指導した教科等



集合学習を実施する連携協力校が指導している教科等を見ると，体育（29校）と音楽（19校）を指導している学校が多くなっている。体育の内容・領域では，ゲーム，ボール運動，リレー，集団行動を，音楽では合唱・合奏などを扱うなど，多くの児童が一堂に会することにより実際に学習の効果が高くなると考えられる内容や領域を重点的に取り扱っていることが分かる。

なお，特別活動（８校）では，修学旅行，社会科見学，ミニ運動会，スケート授業などを行っている。こうした学習活動も集合学習の意義やねらいを踏まえて実施されているものと考える。

④　集合学習の総授業時数



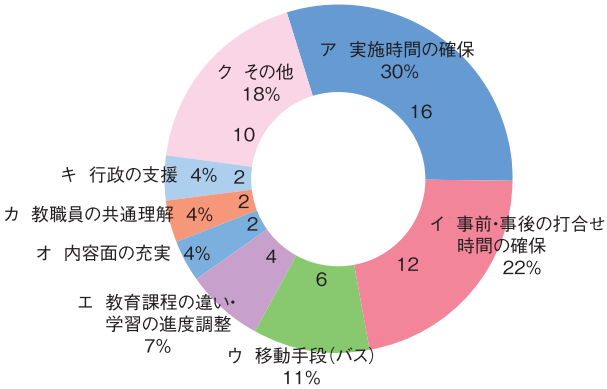
集合学習における年間の総授業時数は，５～９時間程度を充てて実施している学校が全体の半分となっている。また，各学校（地域・ブロック）ごとの実施時間を比較すると，最低が２時間，最高が20時間とかなりの幅があることが分かる。

なお，平均実施時間は9.5時間となっている。

この年間の総授業時数は，各学校の年間指導計画全体に占める割合からすると，集合学習にかける時間は決して多くはない。

このことは，集合学習を実施する上で，児童にとって大きな効果をもたらすことは分かってはいても，時間的・実務的，経費的にも大きな負担がかかることから，できるだけ必要最小限の時間に抑えたいという考えがあるのではないか。

⑤　集合学習を実施する上での課題



最後に，集合学習を実施する上での課題について尋ねてみた結果が次のグラフである。

多い順に，「ア　実施時間の確保」（30％16校），「イ　事前・事後指導の打合せの時間の確保」（22％12校），「ウ　移動手段（バス）」（11％６校），「教育課程の違い・学習の進度調整」（7％４校）等となっている。また，「クその他」の内容として，評価がしずらいことや進学先の中学校が異なるため継続した指導が難しいこと，各校の少子化が一層進み学校統廃合が進んでいるという問題が挙げられている。

こうしたことから，指導する教師には，運営上の課題や集合学習実施に向けた準備などが課題になっているという意識が強いことが分かる。

(2)　管内の市町村教育委員会及び主要な学校を訪問した際の聞き取り調査から

次に，集合学習の現状と課題について聞き取り調査するため，平成20年８月から平成21年１月までの５か月余りにわたり，釧路管内及び根室市の教育委員会とへき地・小規模校を訪問し，整理したのが図表１の「平成20年度釧路管内における各市町村（ブロック及び学校）の集合学習の実施概要」である。

この調査から把握し，明らかになった集合学習実施上の成果と課題をまとめると，次のようになる。

ア　成果

○　集合学習や交流学習を継続することで，多様な考えに接し，思考を深めるなどの児童の変容が多く見られるようになっている。

○　多人数で学ぶ楽しさを味わえる指導計画が工夫されている。

・子どもによる学び合いが生まれる全習，分習の取組
・一人一人のよさを伸長させる協力教授の方法
・一人一人を見取るチェックカードの活用

平成20年度釧路管内における各市町村（ブロック及び学校）の集合学習の実施概要

	集合学習を実施している学校の主な内容		
	実施校	実施している教科や領域	主な取組内容と課題
釧路市	仁々志別小学校 中徹別小学校	生活（自己紹介）、音楽（合唱・器楽学校）、体育（リレー遊び、サッカー、バスケットボール等）	・なかよし交流会の実施 ・生活科体験学習、社会見学の実施（実施上の予算面や見学先の距離の問題） ・図画工作や生活科など、より実態に合った内容の工夫 ・２校実施での対応の工夫〈布伏内小学校（H19廃校）〉
釧路町	昆布森小学校 知方学小学校 仙鳳趾小学校 （H20廃校）	音楽（リズム他） 図画工作（まとあてゲーム） 体育（ドッチボール、サッカー、長靴アイスホッケー等）	・５月、９月、11月は３校、３学期は知小、仙小２校での実施。修学旅行なども複数校で実施。 ・実施回数の増加と、移動時間の工夫を検討。 ・教員による打ち合わせ回数の検討。 ・スポーツ交流会の意義が薄れている。
厚岸町	床潭小学校・厚静小ブロック 上尾幌小学校・尾幌小学校・片無去小学校ブロック 太田小学校・高知小学校ブロック	音楽（合唱、合奏）、体育（ドッヂボール、ミニバレー、集団ゲーム）	・複式交流会の実施（町内小規模校の体育的、文化的交流）。 ・各ブロックごとの取組だが、児童の人数に合わせてグループ分けや内容を工夫している。 ・複式音楽交流会（町内の小・中規模校の交流） ・練習等にかける時間の工夫。
浜中町	西部ブロック 茶内第一小学校・茶内第三小学校・西円朱別小学校 南部ブロック 琵琶瀬小学校・榊町小学校・散布小学校 東部ブロック 浜中小学校・貰人小学校・姉別小学校・姉別南小学校	体育（サッカー、バスケットボール、水泳、スケート等）音楽（全校音楽）、特別活動（カルタ大会）、 全校集会、音楽、体育、その他 国語、音楽、体育	・集合学習開校式の実施 ・へき地複式小学校陸上交流会の実施 （運営の仕方、競技種目等について検討） ・へき地複式文化交流会の実施（合唱、器楽合奏等） （プログラムの組み方、楽器の出し入れ等に工夫するなどスムーズな運営が課題である） ・７校合同修学旅行、社会科見学の実施 （事務局が中心となり、実施期日や行き先、旅程、宿泊先等、参加者の調整、旅費等を検討・決定する。隔年で実施）
標茶町	御久沼ブロック 久著呂中央小学校、沼幌小学校、中御卒別小学校 阿歴内小・塘路小との交流学習（阿歴内小学校、塘路小学校、中茶安別小学校）	体育（サッカー、バスケットボール等） 体育、音楽中心	・へき地少人数複式併置校における練り合いのある授業づくりについて研究推進 ・移動時間がかかり、実質の指導時間が確保できない ・進度調整の難しさ、管理職は各校で対応する。
弟子屈町	美留和小学校 奥春別小学校 昭栄小学校 和琴小学校	国語、算数、生活、音楽、図画工作、体育	○集合学習の計画～全体理論の構築と各部会との情報交換～ ・集合学習で実施した指導案の整理と保管 ・自己評価カード、見取り表、事後研究の記録整理と保管 ・研究集録の作成 ・保護者向け「集合学習だより」の発行 ・複式四校教職員向け「研究部だより」（集合学習に関すること、各校の授業研究等の情報など）の発行 ・ねらいを明確にした集合学習の展開を通して、児童の活動の広がりや思考の深まりを目指す工夫 ・多人数で学ぶ楽しさを味わえる指導計画の工夫 ・一人一人のよさを伸ばす協力教授の工夫 ・一人一人を的確に見取る方法 ○合同生活科「ましゅうランド」の実施 ○複式四校合同修学旅行の実施 ○複式四校冬のスポーツフェスティバルの実施 ○複式四校顔合わせ会の実施
鶴居村	下幌呂小学校 幌呂小学校	理科（移動理科教室）、体育、特別活動（ミニ運動会、スケート記録会等）	・交流授業研究の実施（年２回） ・交流学習の実施 （ミニ運動会を実施する際の競技種目の事前の練習方法の工夫、保育園との交流や動物園を利用した新たな交流の拡大検討） ・合同社会科見学の実施

※註１　平成20年度、白糠町においては、集合学習を実施している学校がないのでこの表に含めていない。
※註２　一部平成19年度の資料を参照したブロック・学校を含んでいる。

○　集合学習の研究を共同で進めることで，個々の教師の協働参画意識が高まるとともに，自校にはない共通の学年同士での実践や教室環境作り等において情報の交換がスムーズに行われている。

○　集合学習を実施するために指導者の事前・事後指導などの工夫がされていること

・直接打ち合わせ会議を持つだけでなく，メールやＦＡＸでのやり取りを行っている

○　複数校による集合学習の研究が，あたかも同一校で行っているかのように綿密な連携・協力のもとに行われていると同時に，研究による集合学習における子どもへの取組が教師の意欲や力量形成につながっていること

イ　課題

○　集合学習の研究内容が各学校の研究と必ずしも一致・関連しているとは限らないため，研究の理論が深まらず収束してしまう傾向が見られること

○　全習と分習の関連を一層明確にし，質の高い学習ができるようにするため，集合学習の事前・事後の打合せのための時間の確保が必要になること

○　各学年ごとに，どのような教科・単元で集合学習が可能であるかについて今後とも実践・検討していく必要があること

2　弟子屈町における集合学習の取組

次に，実際の集合学習の取組として，弟子屈町へき地複式四校連絡協議会（以下，本複式四校連絡協議会という）の活動を紹介する。

本複式四校連絡協議会では，弟子屈町のへき地教育の

合同生活科「ましゅうランドへようこそ」実施計画

弟子屈町複式四校連絡協議会低学年部会

1．ねらい
・町内の５校の低学年児童が集まり、お店屋さんごっこをすることを通して、他校友達や招待した幼稚園児や保育園児を楽しませようと工夫したり、活動を楽しんだりする。
・一緒に声をかけ自分たちが考えたことが友達を楽しませた時の喜びを味わわせ、「みんなでやってよかった。またやってみたい。」という達成感を持つ。
・活動を通し仲間意識を育て、集団とのかかわりを身につける。

2．日時
・平成20年12月４日（木）
・準備時間　9：00～10：00　　・ランド開催時間　10：10～11：10

3．場所
・奥春別小学校　体育館

4．参加校

	１年生	２年生	計
川湯小学校	8	5	１３
和琴小学校	3	3	6
奥春別小学校	1	1	2
美留和小学校	0	4	4
昭栄小学校	1	1	2
合　計	１３	１４	２７

5．当日の動き、会場（当日の動き）
9：00　奥春別小学校　体育館での準備開始
9：30　各小学校、奥春別小学校に到着予定（児童玄関）
9：40　各小学校、体育館で出店準備
10：00　各出店など最終確認、お店紹介
10：10　ましゅうランド開店
11：10　ましゅうランド終了、後片付け
11：30　５校交流タイム
12：10　昼食（体育館でお弁当・４グループに分かれる）
12：50　各小学校、奥春別小学校出発

6．その他
・小学生の出入口については児童玄関を使用する。
・幼稚園児と保育園児、来客の出入りについては、体育館入り口を使用する。
・靴置き場として、ブルーシートを準備する。
・小学生の荷物やコート類は１・２年教室に置き。
・幼稚園児と保育園児の荷物やコート類は図書室に置くよう案内しておく。

7．必要物品
・長机、椅子、児童用机、ブルーシート、スリッパ

※各学校の出店に必要なものを物品貸し出し用紙に記入して連絡してください。
12月１日までに美小（桐澤）まで（事前に会場校と現有数を確認）

8．各校で準備するもの
・弁当、水筒（ペットボトル可。茶か水）、上靴
・出店するもの、名札（学校名・学年・名前　形式自由）、もって帰る袋

（会場図）

9．役割分担
・会場設営・準備　　会場校
・全体進行　　美留和小学校　桐澤
・借用物品、使用物品集約　　実行委員長
・各種文書　　実行委員長
・バスの手配　　四校連協議会事務局
（連絡と調整）
・幼稚園、保育園案内作成　　四校連絡協議会事務局
・広報（町、新聞社）連絡　　四校連続協議会事務局

10．生活科としての関連内容
上巻「おみせたんけん」　下巻「秋のたからもの」
弟子屈町合同生活科「ましゅうランド」

望ましい在り方を求めて，美留和小学校，昭栄小学校，和琴小学校，奥春別小学校の４校が協力して「へき地・小規模校・複式の三特性を生かした，児童一人一人の能力や個性を伸長するへき地複式教育の創造」を研究課題に掲げ，研究を進めている。

本複式四校連絡協議会の取組は，年５回の集合学習の実施をはじめ，合同生活科「ましゅうランド」や児童顔合わせ会，冬のスポーツフェステバルの開催，各校研究内容の交流，へき地教育かかわる各種研究会，研修会の報告，教職員親睦交流会の開催など，年間を通して実に様々な取組が計画・実施・評価されている。

ここでは，実際に視察をさせていただいた合同生活科「ましゅうランド」の取組を紹介し，そこから浮かび上がってきているいくつかの課題を整理しておくことにする。

「ましゅうランド」は，町内の５校（本複式四校に川湯小学校が加わる）の低学年児童が集まり，自分たちの考えたお店屋さんに他校の友達や幼稚園児や保育園児を招待して，みんなで活動を楽しむという合同生活科の授業である。「ましゅうランド」の当日の取組の様子については，実施要項に詳しく掲載されているが，子どもたちはこの学習を通して，

① 一つは，活動の広がりや思考の深まりを自ら実感するとともに，学ぶ楽しさや成就感を味わうことができること

② 二つ目は，子どもたちの学ぶ姿勢に合わせて教師が適切で効果的な支援をすることで子どもたち一人一人のよさを伸ばすことができること

③ 三つ目は，多人数で学ぶ楽しさ味わうことのできる具体的な取組として，全習・分習における指導の明確化，一人一人のよさを生かしたり，伸ばす協力教授の在り方，一人一人を的確に見取る工夫をするなど実践的な研究が展開されていること

など，集合学習のよさを生かし，更に多人数による学習の長所を重ね合わせることにより，集合学習のねらいをより効果的に達成しようとする取組として高く評価できる実践であると考える。

また，この「ましゅうランド」実施後に，担当教員による「振り返り」のための協議を行い，その成果や課題を整理するとともに，次年度への展望を挙げている。

○　成果としては，

・ほぼ190人の多くの幼児児童，教員，教育関係者が集い，活動を盛り上げたこと
・各学校の児童が幼児たちのために，力を合わせてお店屋さんごっこに集中できていたこと
・参加していた他校の児童と交流が深まるとともに，招待された幼児たちも大変満足していたこと
・お店や子どもたちの活動の場も工夫されていて，運営がスムーズに行われていたこと
・複式四校が早い段階で日程と会場を決定したので，準備を円滑に行うことができたこと
・会場校が物品準備や暖房等の細やかな配慮と運営がなされたので，活動をスムーズに進行することができたこと

○　課題としては，

・参加者した保育所の幼児等の数が多過ぎたため，お店に長蛇の列ができ，待ち時間が長くなってしまったこと
・参加者が多くなってしまったため，お店に買い物に来たお客さんへの景品をたくさん作らなければならず，多くの時間を費やしたこと

・児童は自校のお店で買い物に来たお客に対応するだけで手一杯となり，他校のお店に買い物に行くなど，楽しく交流する時間が取れなかったこと
・事前の参加人数の把握と，確定した人数に応じた速やかな対応を高じる必要があったこと
・活動費用については，低学年部会の活動費も合わせることで，有効な遣い方が可能であること

○　次年度の展望としては，
・児童幼児の送迎にかかる距離的，時間的な点を考慮すると，奥春別小学校で実施したことは運営面からみてもスムーズだったことから，来年も奥春別小学校で実施したい。
・お店屋さんはゲーム的な要素のものが多く見られたが，更に子どもたちの交流を深める上でも，新たな工夫を考えていきたい。
・お店屋さんごっこを通して，児童同士の交流による深め合いを更に積極的に進める工夫を考えていきたい。
・児童の係として，待っている子どものために新たな係の設定を検討していきたい。

こうした，成果や課題，次年度の展望からは，集合学習の教育課程上の問題，授業実践上の問題，児童の送迎の問題をはじめ，実質実施時間や関係校の連絡調整の方法や共通理解の取り方など，運営上の課題が浮かび上がった。

次に，釧路小中学校教頭会の教頭先生に協力をお願いしたアンケート調査と，管内の市町村教育委員会及び主要な学校を訪問した際の聞き取り調査により課題を整理する。

3　課題の整理

長い歴史をもつ集合学習研究の中で，へき地・小規模校に勤務する教師の創意と工夫によって，多くの価値ある実践的な成果を挙げてきている。ただ新しい学習指導要領（平成21年３月）が示すように，知識基盤社会やグローバル化が急激に進展する今日にあっては，確かな学力，豊かな心，健やかな体の調整を重視する「生きる力」の育成がますます重要になっている。だから今こそ，これまでの集合学習の実践を通して創り上げてきた財産を継承しつつ，一方で洗い出された問題点を整理し，集合学習によってもたらされる教育的効果をへき地・小規模校の持つ特性として生かすために，その運営や内容などを一層充実させていく必要があると考える。

そこで，今回の実地調査やアンケートの結果から浮き彫りになってきた課題を整理する。

①　教育課程編成・実施上の問題

各学校にはそれぞれに地域の実情や実態，歴史や文化，伝統，そして児童の実態，地域住民の思いや願いに基づき，独自の教育目標のもとに教育課程を編成している。集合学習を計画実施する場合には，実施する学校間の教育課程を比較・調整しながら，具体化していくことになる。その結果，時間的，実務的に大きな負担が増えることになる。

②　実施事前・事後打ち合わせの問題

集合学習では，一つの授業を創り上げるまでに，実態の分析から目標設定，計画，実施，評価と，集合学習を実施する関係学校の担当教員による周到な打ち合わせが必要になる。特に，全習と分習との関連を調整したり，全習での協力教授（TT 方式）の具体化について話し合う必要が生じることから，会議の設定，出張命令，旅費等の問題が派生してくる。

③　児童生徒の送迎上の問題

集合学習における現実的な問題となるのが児童の送迎の問題である。近隣の学校といってもそのへき地性から，学校間の距離がかなり遠くなることも少なくない。遠距離移動となると，そのために時間的なロスが生じるとともに，児童の疲労の問題も生じてくる。さらに，バスなどの輸送手段によって生じる経済的な問題がこれに重なってくる。

④　前年踏襲パターンからの脱却の問題

集合学習の授業を企画・運営するためには，上述のように膨大な時間と労力が必要になることから，どうしても前年の実績を踏襲して同じ題材を使用したり，同じ指導内容での実践を行いがちになる。これでは集合学習本来のよさが生かされないことになっしまう。

集合学習が魅力的で実り多い実践として継承されていくためには，常に新たな実践例を創り出す生みの努力と，教育行政をはじめとする各方面からの支援が欠かせないのである。

⑤　学校統廃合と集合学習の関係

アンケート調査の課題の中にも出されていた問題である。これまでにも，しばしば「集合学習は，学校統廃合の前提的活動・過渡的対応」という視点で見られてきた経緯があるようである。実際に，集合学習が盛んに行われてきた地域での先駆的な実践が，学校統廃合をもって幕を閉じているという現実も見られる。

学校統廃合の問題は，保護者の考え方，地域住民の意志，市町村の政策的な意図など，様々な背景が複雑に絡み合って浮上してくることが多いが，まずは教育的な観点に力点を置き，へき地・小規模校のよさを生かすことと，適正規模の集団を必要とする学習があることを矛盾のないように整理して，共通理解を図っていくことが必要である。

4　今後の集合学習の方向性

今後の集合学習の方向性について，運営面，指導面から整理してみたい。

⑴　運営面

○　児童の送迎による移動時間は，実質の学習時間が制約されるなど，その影響力は極めて大きい。

そのため，学校と教育委員会が連携して，

・効率的なバス等の輸送手段，方法を工夫する。

・移動しなくても，インターネットやテレビ会議システムなど，自校にいながら集合学習が可能な機会を一部組み入れる（集合学習は，直接一堂に会することに最大のメリットがあるため）。

○　全習・分習を余儀なくされる集合学習は，そのための教師による事前・事後の打合せに相当な時間を要するし，内容を一層充実するためにできる限り綿密な打合せが求められる。

そのため，

・直接集まって打合せを行うことを基本としながらも，時には電話やファックスの他に，インターネットによるテレビ会議（市販ソフトを活用することで安価に対応が可能）を活用することで，移動時間を気にせず打合せを行うことができる。

○　複数の学校が連携・協力して行う集合学習を円滑に実施していくためには，学校間の努力と教育委員会の支援，地域住民の理解が欠かせない。

そのため，

・学校規模の差異，児童生徒の実態，教師集団の考え方の違い，集合学習の歴史や意義，その有効性など，学校間の共通理解を十分図れる実施体制づくりに向けて，ＰＤＳＡのマネジメントサイクルを踏まえた研究の推進が必要である。

・経済的，運営面での計画的な教育行政の支援と理解に向けた，集合学習の実施状況や課題，他ブロックの状況などの情報提供が大切である。

・へき地・複式校ならではのよさを生かした集合学習の成果と子どもの成長を地域住民に情報提供すると同時に，必要に応じて積極的な協力をお願いすることも大切である。

⑵　指導面

○　集合学習を実施する学校間で，教育課程の違いを踏まえたより弾力的な運用を見据えた集合学習計画・実施・評価システムの開発を進める。

○　学校間の枠や壁を取り除き，児童同士，児童と教師，教師同士の良好な人間関係を築くとともに，へき地・小規模校のよさを生かす教材の開発や複数の教師が自校と他校の児童生徒を指導する協力教授の方法を工夫し，その指導方法の可能性を探る。

○　集合学習の意義やねらいを達成するため，学習すべき教科，道徳，外国語活動，特別活動及び総合的な学習の時間など，更なる検証の機会と場の拡大，またそれを支える学校間の連携の強化を図る。

○　近隣の小規模校による集合学習から，中規模校も含めた集合学習・交流学習も視野に入れ，児童の社会性や協調性を育成する場の拡大を中・長期的に図ることである。

○　集合学習の充実やその拡充を図るためには，管理職の積極的なリーダーシップと集合学習に対する理解が極めて重要である。

5　終わりに

へき地・小規模校の教育の充実を図るためには，へき地性，小規模性，複式形態など，へき地の特性を生かした創意ある教育課程を編成し，自主性・創造性豊かな児童生徒の育成を図ることが大切である。

本研究では，へき地・小規模校の特性を生かした教育活動の充実を一層図るため，釧路管内における集合学習の取組に焦点を当て，その現状を調査・分析し，そこから浮き彫りになった課題から，今後の集合学習の在り方について改めて考察を加えてきた。

現在，各学校においては，新しい学習指導要領のもと創意工夫ある教育活動の展開を進めているところであるが，これまでへき地・小規模校においては，教職員一人一人が知恵を出し合い，その特性を最大限生かすと同時に，マイナス部分の改善を図るなど，創意工夫ある教育活動が展開されている。特に，コミュニケーション能力や協調性など社会性の育成を図る上で教育的な効果をもたらした集合学習は，新しい教育課程を編成・実施する上でも，その可能性にはまだまだ未知なるものがある。

このことは，集合学習の取組が新しい地域教育活動の在り方に対する提案，新時代の学校教育の革命的な教育活動として教育界の大きく価値ある話題となるだろうと確信している。

へき地・小規模校を愛する教師たちには，是非，集合学習の意義や可能性をこれからの実践を積み上げなが

ら，更なるその充実に向けて研究を推進していただくことを期待したいと考える。

引用・参考文献

・文部科学省「小学校学習指導要領解説」2008年９月ぎょうせい
・全国へき地教育研究連盟「新しい時代を拓く心の教育シリーズⅡ ふるさとに立ち，逞しく生きる力を育む教育の在り方 ～へき地･小規模･複式学級を有する学校の地域に根ざした学校･学級経営の実践事例集～」2004年
・全国へき地教育研究連盟「新しい時代を拓く心の教育シリーズⅢ 個性を生かし，確かな学力を育む教育の在り方 ～教育に展望をもつへき地･小規模･複式学級を有する学校の自ら学ぶ態度･能力を身につけ，共に高まっていく学習指導の実践事例集～」2005年
・全国へき地教育研究連盟「21世紀を拓く教育シリーズⅣ ふるさと発『生きる力』を育む教育の創造～へき地・複式・小規模学校の課題解明へのアプローチ～」2001年
・全国へき地教育研究連盟「へき地・複式・小規模校学校Ｑ＆Ａ」1998年10月
・釧路へき地複式教育研究会「平成20年度釧路のへき地複式教育研究紀要」2009年３月
・玉井康之「へき地・小規模校教育研究の領域と現代的な可能性」へき地教育研究第60号2006年２月
・玉井康之「子どもと地域の未来をひらく へき地・小規模校教育の可能性」2006年４月教育新聞社